

農村漁村研究家 あん・まくどなるどさん

国連は世界の様々な生態系を調べあげる計画を進めている。砂漠や熱帯林などの自然とそこに住む人々とのかわりを科学者を動員して調査している。これは地球温暖化を総合的に分析し警鐘を鳴らした気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の生態系版を指す動きだ。その一環で日本の里山・里海を対象にした調査が今年から本格的に始まった。

最初は北信越(北陸と信越)を対象に構想が充て、最終的には日本全国を対象に調査が始まりました。北信越のほか、北海道・東北、関東・中部、西日本の四ブロックに分け作業が進んでいます。私が所長を務める国連大学高等研究所のいしかわ・かなざわオベレーティング・ユニットは北信越

# サトヤマを世界に

が調査地域。こうした研究組織を持たない他ブロックとはひと味違った任務を負っています。里山・里海の生態系を調べるだけでなく、その作業を自治体や地域の人々の力を合わせたボトムアップで進めることです。先進国では大学や国の研究機関が中心となつて調査を進められますが、途上国では農業や漁業の現場に直接かかわってきた人たちの知恵を頼りて進めなければなりません。私たちの取り組みが、これからアジア各地で里山的な環境の調査を進めるモデルケースになると考えています。

オベレーティング・ユニットは石川県と金沢市の強力な支援を受けている。また日本全体の調査をまとめる科学委員会の共同議長を務める金沢大の中村浩二教授が頼りになる相談相手になっていく。五月下旬にドイツのボンで開いた生物多様性保護条約の締約国会議で、国連大学高等研究所や環境省などの主催でシンポジウムを開き、谷本正憲石川県知事にも来ていただきました。北陸の自然をPR、会場で神子原みこ(こはら)米など里山の恵みを配り好評でした。



石川県漁協女性部通常総会

地元の石川県漁協女性部通常総会でメンバーと談笑する(右から2人目)

## 日本の里山調査、国連が本格始動 地元の人たちの知恵が頼り



里山・里海の生態系報告は二年后に名古屋で開催される生物多様性保護条約の十回目の締約国会議に提出する予定ですが、提出して終わりではなく、報告が政策づくりにつながるのが私たちの望みです。ボンの会場にいらしたアセアン生物多様性センター(フィリピン)の所長が「政策関係者との連携が早期からあるのは素晴らしい」と励ましてくれました。

人間の手が入って保たれる自然環境が里山・里海であると定義するならば、そうした環境は日本だけではなく世界各地にあり、それぞれ多様な形で人と自然がかかわって生態系が保たれているはず。人の手が入らなくなったら生態系はどう変わるのか。いったん崩れた人と自然の関係を取り戻すにはどうしたらよいか。日本に限らず普遍的な課題だと思えます。

四月、まだ風が冷たい能登半島珠洲市の浜辺に横ばい式塩田を営む角花豊さんを訪ねた。砂に丁寧に海水を散布し天日で水分を蒸発させて濃い塩水をつくる。千一年以上続く塩づくり

## 問題解決のヒント、アジアから

は国の無形文化財に指定されている。短パンにはだして塩田を歩く角花さんは日本海を歩くと「天気が続かないで話しました。天気が移ろいやすい日本海ですが、角花さんは長年、五感を傾けて天候を読んでこられました。そんな方にも最近はや予測が難しくなっているようです。昨年、IPCCが「気候の温暖化には疑う余地がない」と、強い危機感をにじませた報告をまとめた。しかし途中経過をみると、もっと強いメッセージが出せました。その思いが活かせません。科学者がまとめた報告が最終段階でずいぶん弱められました。その一方で思うのはIPCCが欧米の価値観を色濃く映した組織であることです。かわる科学者の多くが欧米人だからです。アジアの声がもっと強く反映されていいと思います。地球温暖化と食料生産、生物多様性保護の問題は複雑にからみあったもの集のようです。アジアからの情報発信が、からまった結び目を解くヒントになれば素晴らしいと思います。

最後に、私の名前ですが、まあやかな表現ができる平仮名が好きです。長年使い、私のアイデンティティーの一部です。(聞き手は 編集委員 滝順一)

## ひとスクランブル

ちのただお 千野 忠男さん

(元大蔵省財務官、前アジア開発総裁)



一九九二年秋、取材で旧大蔵省の財務官室を訪ねると執務机の花瓶に見慣れない白い実をつけた植物がいて、あるのが目に留まった。

日本



「TDE」は主演した花井

今回は作家の半藤一利さん

異例の抱負だった。前任の内海孝氏は「千野さんはアジアと組んで米国に好対峙したい」という意図が強かったと振り返る。入省前に米スタンフォード大に留学するなど「米国前の千野さんがアジアに傾斜するきっかけになった」という動きが出た。千野さん自